

女子大学生の自己呼称に関する心理学的分析

宮 沢 秀 次

問題

私たちはさまざまな人間関係とその状況のなかでさまざまな呼びかけ（呼び方）をされ、また自分の呼び方をしている。同様に、相手に対する呼びかけ（呼び方）もさまざまである。

自分の呼び方として一般的に多く使われる言葉は「私（わたし）」であろう。このような自分が自分を表現する言葉は、自称詞という。言語学的には、この「わたし」などの言葉は一人称詞といわれる人称詞である。

自称詞は、相手が目上、対等、目下すなわち自分と他者との関係性によって、主に一人称詞、親族名称（お父さんや兄さんといった呼び方）や職業名（先生といった呼び方）が使われる（鈴木孝夫, 1973）。

また、発達のなると、自分の名前による自称詞は1歳半ころからみられること（河崎道夫, 2005）、そしてそれは周囲の人々からの自分への呼びかけの反復であり、自称詞は幼児期から青年期にかけて自分の「名前」から「わたし」へと変化すること（西川由紀子, 2003a, 小嶋玲子, 2005）、地域的分布がみられること（小嶋裕将, 2014）などが明らかになっている。男児が親には「ボク」を園内の友だちには「オレ」を使う傾向があり、自己主張や自慢の気持ちが背景にあること（西川由紀子, 2003a）には、他者との関係性によるだけでなく自称詞の使用が自己意識と関わっていることを示している。

自称詞の使用には明らかな発達の性差がみられる。小嶋玲子（2005）によると、小学校6年生では、男子で「名前・愛称」をまず使うことはないが、女子では10数%が使っている。このようにその使用の時期については、男女で異なる。つまり、青年期には、男子で自称詞に自分の名前を使うことはなくなるといえよう。

大学生の自称詞の使用とその変化はどのようなであろうか。女子学生においては、自分を言い表すのに自分の名前を使うことがときどき見受けられる。男子学生では、集団活動のなかで形式的に「1番 ○△（姓（名字）あるいは姓名）が行います」などといった使い

方がみられる程度であり、一部の女子学生が日常的に使う場合とは異なる。かわいらしさの一表現であるのか、「わたし」という言葉の一般性に対する反発、すなわち自分という固有性の主張の反映であるのか、あるいは単なる幼児からの習慣の延長であるようにも思われる。

そこで本研究では、女子大学生の自称詞の使い方（自己呼称）について、使われる状況（相手）、他者からの呼ばれ方（他者からの呼称）、回想法によるこれまでの変化を明らかにしようとする。

ところで、どのような自称詞をどのように使うかという観点は、自分をどのように呼び表現するかということである。これまでみてきた研究では自称詞という言葉が使われているが、言語学的意味合いが強く感じられるので、自称詞を自（己呼）称詞と解し、自称詞の使い方を意味する「自己呼称」という概念として整理していきたい。つまり「自己呼称」は、自分を表現する言葉であり、一人称代名詞あるいは自称詞や固有名詞などが発達段階や相手との関係性、自己意識のあり方などの状況に応じて使われる。それに伴って、他者からの呼ばれ方は「他者からの呼称」と表現することとする。

方法

調査時期：調査は2013年6月から7月に実施した。

調査協力者：東海地区の2つの大学の女子学生2,3年生37名である。なお、13名の男子大学生からも回答協力を得たが、ここでの分析には用いていないので、調査協力者数には含めないこととした。

調査実施方法：筆者担当の授業の時間中に、受講学生に無記名調査への回答協力依頼した。そのさいには、回答の秘密の厳守、プライバシー侵害への配慮について十分に説明し、回答は研究目的以外には使用しないことなどを説明し、協力を得た。

調査票：

調査項目は、現在での他者（親、友だち、恋人、アルバイト先で一緒に働いている人）からの呼ばれ方（他者からの呼称）、またそれぞれについてある状況での呼ばれ方、現在の呼ばれ方で印象的事柄をたずねるものである。具体的に示すと、「あなたは、現在、どのように呼ばれていますか。（1）親からは………たいてい（ ）と呼ばれている。」と空欄の（ ）に記入を求め、さらに「（ ）ときには、（ ）と呼ばれている。」と記入を求めている。

他者（親、兄弟姉妹、友だち、恋人、アルバイト先で一緒に働いている人、大学の先生）と話す時の自己呼称の仕方、それぞれについてある状況での自己呼称の仕方、などである。具体的に示すと、「あなたは、人前（次にあげる人と話しているとき）では、自分をどのように呼びますか。（1）友人と話す時は………たいてい自分を（ ）と呼ぶ。

() ときには、() と呼ぶ。」と空欄の () に記入を求めている。

また、小さいときからこれまで、どのように自己呼称が変化してきたかについても尋ねている。

いずれも自由記述（文章完成法）での回答形式である。

結果

1 自己呼称の全体的傾向

「(たいてい) 人前では、自分をどのように呼びますか」という質問に対しての回答をみると、自分を「私(わたし)」と呼ぶのは、どの相手に対しても最も多く、親には 16/36 名 (44.4%)、兄弟姉妹には 14/34 名 (41.2%)、友だちには 20/38 名 (52.6%)、恋人には 10/19 名 (52.6%)、アルバイト先では 27/32 名 (84.4%)、先生には 33/36 名 (91.7%) であった。「一人称のくだけた言い方」(広辞苑) である「あたし」は、それぞれ 3 名 (8.3%)、3 名 (8.8%)、4 名 (10.5%)、2 名 (10.5%)、1 名 (3.1%)、0 名であった。また、「自分。わたし。関西方言で、多く婦女子が使う。」(広辞苑) ところの「うち」は、親には 8 名 (22.2%)、兄弟姉妹には 5 名 (14.7%)、友だちには 12 名 (31.6%)、恋人には 4 名 (21.1%)、アルバイト先では 2 名 (6.3%)、先生には 1 名 (2.8%) であった。「自分」を使うと答えたのは、アルバイト先では 1 名 (3.1%)、先生には 2 名であった (5.6%)。

このように女子大学生は自己呼称するときには、「私」、「うち」、「あたし」という一人称の代名詞を最も多く使っている。

相手との関係性を基にした自己呼称は、家庭(家族)内で使われている。兄弟姉妹での出生順位である「お姉ちゃん」(親族名称)あるいは「ねーちゃん」は、親に対しては 3 名 (8.3%)、弟妹には 6 名 (17.6%) が使っていると答えている。また、時に使うと答えたのは、それぞれの相手に 1 名、3 名であった。家庭内での親族名称が使われるのは、弟妹がいる場合に限られるのはいうまでもない。

自分の名前(固有名詞)あるいはその口語発音を使うと答えたのは、親に対しては 6/36 名 (16.7%)、兄弟姉妹に対しては 6/34 名 (18.8%)、友だちに対しては 2/38 名 (5.3%)、恋人に対しては 3/19 名 (15.8%)、アルバイト先では 1/32 名 (3.1%)、先生には 0/36 名であった。また、時に使うと答えたのは、親に対しては 5/36 名、兄弟姉妹に対しては 2/34 名、友だちに対しては 2/38 名、恋人に対しては 1/19 名、アルバイト先では 1/32 名であった。

2 他者からの呼称の全体的傾向

「(たいてい) 相手からどのように呼ばれていますか」という質問に対する回答をみると、

固有名詞すなわち「名前」あるいはその口語発音で呼ばれるのは、相手が親では34/37名(91.9%)、友だちでは29/37名(78.4%)、恋人では15/16名(93.8%)、アルバイト先では10/30名(33.3%)であった。「お姉ちゃん」など出生順位という関係性からの呼称(親族名称)は、親から3名(8.1%)であり、時には親から呼ばれるのは5名であった。

名字で呼ばれるのは、友だちからが8/37名、アルバイト先では19/30名であり、恋人からは一人もなかった。

3 自己呼称が変わった時期と理由

自己呼称は発達の過程で変化している。自由記述にもとづいて、自己呼称が変わった時期とその理由についてみていこう。

次に示す事例では、自己呼称が入学を契機として変化してきた様子が述べられている。

「(幼稚園時は)……“ゆいちゃん”と呼んでいたと後から聞いた。(小学生の頃)“わたし、あたし”と呼んでいた。中高のいつからか流行っていたので“うち”と呼ぶようになっていたが、大学に入ってから意識して“私”とよぶようになった……」(5:調査協力者番号, 以下同)

「幼稚園から小学校に上がるときに、私と呼ぶように変わりました。」(37)

「小学校にあがるとき、『ミーちゃん』→『あたし』、小学4年生のとき、『あたし』→『私』」(32)

「『うち』と呼んでいたが、高校に入ってからアルバイトをするようになり、自分のことをなるべく『わたし』と呼ぶように気をつける……」(29)

「高校生までは、……「うち」と呼んでいたが、品がないと思い始め、大学生からは「私」と呼ぶようになった。(周りの人も変わったので変えやすかった)」(16)

このように、自己呼称が入学を契機として変わる事例をみると、小学校入学、中学校入学、高校入学、大学入学時のそれぞれがあげられる。

また、自己呼称の変化はおおまかにとらえると、発達とともに、「名前+ちゃん」、「うち」あるいは「わたし、あたし」、「私」という順序性がみられる。

「小学校の途中までは……『ちゃん』づけで……の中学、高校の途中までは……『うち』と、……アルバイトをはじめたくらいから『私』と言うようになった。」(28)

「小学校5年生まで『ともこ』か「ともちゃん」。友だちに子どもっぽいと言われて変えた。(小4)ともこ、ともちゃん、(小5)わたし、(中3)僕、みー、高1~大1)僕、(今:大2)わたし」(18)

自己呼称を変える理由として、友だちの自己呼称に影響されたことを示す事例がある。

「小さい頃は両親からなあちゃんと言われていたので、自分のことをなあちゃんと呼んでいた。小学校低学年ぐらいに……「うち」と呼ぶ子が増えて……まねをして『うち』と

呼ぶようになった。自分のことをちゃん付けするのが、恥ずかしいと気づき始めた。」(12)

「呼び方を変えた理由は、まわりも変えた為、自分も変えた」(19)

自己意識の高まりから、自己呼称を見直す事例もみられる。

「小4まではわか〇んって言ってた。恥ずかしくなってやめた」(3)

「(小学校にはいってから)自分で自分の名前を1人称に使うことに違和感を感じ、その場には適していないと思ったり、言われたりしたためで……」(6)

「小さい頃は……「ボク」と呼んでいたが、中学校に入る前くらいに「私」に変えた。……面接とかで自分が困りそうだったから」(30)

なお、「男が自分をさして言う語。」(大辞林)である「ボク」をこの事例では、小さい頃に女の子が使っていたことがわかる。

「(さ〇らと言っていたが)なんとなく恥ずかしくなり、中学生位から『うち』と言うようになった。高校生の時、おじいちゃんの前で『うち』といったときに『おい、さ〇らがうちなんて言うようになったかー。大人になったなー。』と言われたのがなんとなく恥ずかしくてそれから『わたし』と言うようになった。」(18)

ここでは自分にふさわしい自己呼称への認識が書かれている。小学生の「さ〇ら」は中学生の自分にあわないので「うち」に変え、高校生あるいはおとなの自分には「わたし」がふさわしいと考えて、自己呼称をかえてきたことが示されている。

家族からの指導や友だちなどの指摘によって自己呼称を変える事例もある。

「家族と話すときには、10才ぐらいで親に言われて、“私”って言うように変わった。」(35)

「(家族や友だちの前でたまに自分を名前で呼ぶ)……小さいころから自分の名前で呼んでいた。……高2のときの彼氏に『そろそろやめなよ』と言われたときは、『親が小さいときに直してくれなかったから』とむかついたことがあった。私は高校入学時新しい友だちの前では直そうと試みたができなかったので、悔しくてたまらなかったことを思い出しました。」(7)

この事例では、「そろそろやめなよ」と幼さを指摘され、自分の名前を使う自己呼称に違和感をおぼえつつも習慣を改めることのできなかった自分への苛立ちが示されている。

自己呼称に名前を使うことは幼さの現れであるという認識は、すでに事例としてみてきた調査協力者番号12, 19, 3, 6, 7, 18の記述にみられる。

4 個別的分析

ここでは、特に現在の自己呼称に注目して、特徴的な事例を取り上げる。

事例1 (ゆーな) 自己呼称が自分の名前

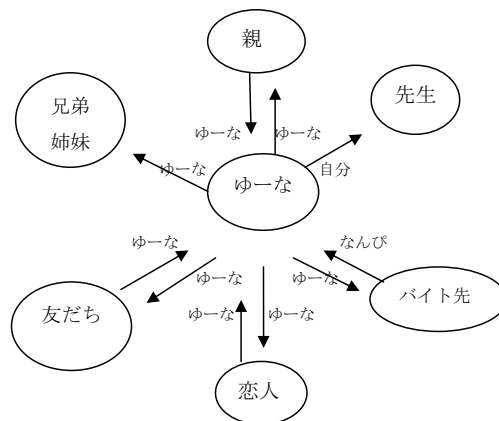
図1に、この女子大学生の他者関係における自己呼称と他者からの呼称を示した。

この事例は、自分の名前「ゆーな」(仮名)を先生以外の周囲の人々に対して自己呼称するものである。「ゆーな」は、他者からも「ゆーな」と呼ばれている。すなわち自己呼称と他者からの呼称がほぼ一致している。

彼女は、「中学から高校にかけて～ちゃんから名前の呼びすてになった」(1)と記述していることから、小さいときから自分を「ゆーなちゃん」と呼んでいたと思われる。本人が自分を「ゆーな」と呼ぶことから、周りの友だちは彼女をそのまま「ゆーな」と呼ぶことが自然であるものと受け入れていると考えられる。

先生に対しては「自分」と自己呼称することは、人間関係の距離感を反映しているであろう。目上の人物やフォーマルな関係の人物に対して使いわけることばに関する認識はあるといえる。

彼女は、自分の名前を「好きでも嫌いでもない」と答えており、特に自分の名前が好きだから使っているということではない。



(図中→は、呼ぶ方向を示す。(ゆーな)→(親)は「ゆーな」が「親」に対して自己呼称する場合である。(親)→(ゆーな)は「親」が「ゆーな」を呼ぶ場合である。以下同。)

図1 事例1 (ゆーな) 自己呼称が自分の名前

「ゆーな」の事例と極めてよく似ているのは、「りか」(仮名)の事例2(図2)である。彼女は、社会的距離のある「先生」や「アルバイト先」では「私」と自己呼称している。「親」と話す時でも、親戚の人がいるときは「私」と表現すると答えていることは、このことを示している。

「りか」は、「自分のことは名前で呼ぶが、もう20歳なので、名前で呼ぶのはやめるべきかなと考えている」(13)と記述している。自己呼称の使い方に、年齢を一つの区切りとしているが、この年齢は社会的地位や社会的関係を背景としているであろう。

「りか」も自分の名前を「好きでも嫌いでもない」と答えている。

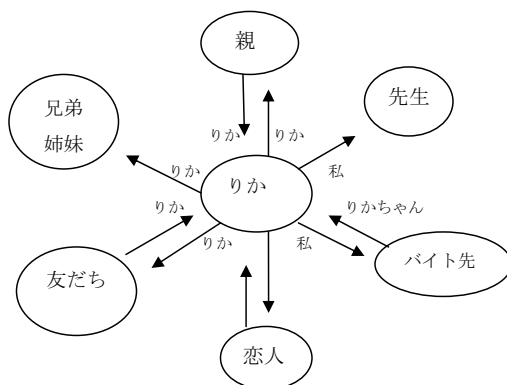


図2 事例2（りか）

事例3（川○みか）自己呼称が「私（わたし）」の事例

この事例は、どのような他者に対しても、自分を「わたし」と呼称しているものである。家族や友だち・恋人といった親しい人からは「みか」（仮名）と名前と呼ばれている。

彼女は「小学校に入る頃位まで、自分のことを『みかちゃん』と呼んでいたけれど、小学校に入って、自分のことを『わたし』という友だちに憧れて、自分のことをちゃん付けで呼んでいる自分が恥ずかしくなって、『わたし』と言うようになりました」（34）と記述している。この記述は、自分を名前で呼ぶことは幼さを意味するものと考えていることを示している。

「みか」は自分の名前を「好き」と答えおり、自分の名前が好きだからといって、自己呼称に用いるとは限らない。

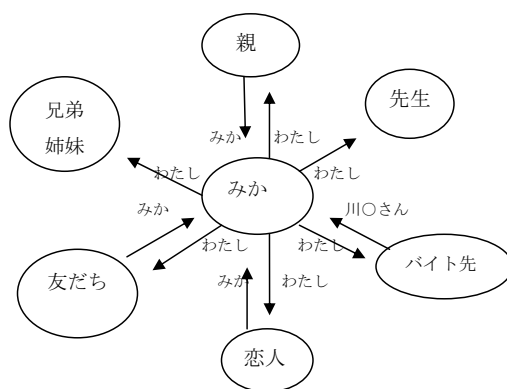


図3 事例3（川○みか）自己呼称が「私（わたし）」

事例4（あ○な）自己呼称を使い分ける事例

相手に対して、自分の名前である「あ○な」（仮名）、「うち」、「あたし」、「私」を使い分けている事例である。彼女は、親や兄弟姉妹のいる家では「うち」、友だちには「あたし」とときには「うち」というくだけた自己呼称を、「先生」や「アルバイト先」の人といったフォーマルな関係の人とは「私」を使い、恋人には自分の名前「あ○な」を使っている。自分との距離感にしたがって、「うち」や「あたし」、「私」を使い、特別な関係の「恋人」には名前を使って自己呼称している。

「小学校1年生頃から、“あ○ちゃん”から“私”に変化し（小学校や親から言われたのだと思う）、小学校中高学年位から、周りが自分のことを“うち”と言うようになり、その影響もあって、私も“うち”と呼ぶようになった。」(9) という。

「親」からは「あ○」時には「あ○な」、友だちからは「あ○な」時には「あ○に」と名前を基本に呼ばれている。この事例は、事例1（ゆーな）とは違って、他者からの呼称と自己呼称が一致の関係にない。

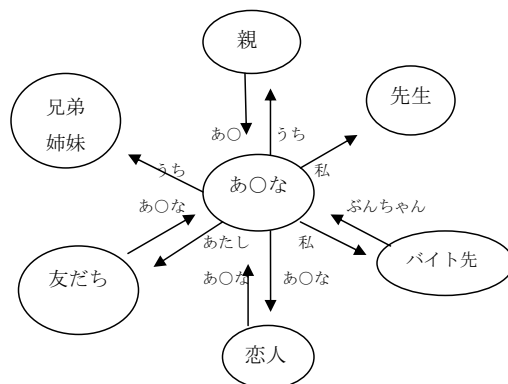


図4 事例4（あ○な）自己呼称を使い分ける事例

事例5（静岡ゆ○）「ねーちゃん」を使う事例

この事例は、家庭内では親族関係（親族名称）の「ねーちゃん」と自己呼称し、家庭外では「うち」と「私」を使うものである。親しい相手の「友だち」や「恋人」に対しては「うち」を、事例2（りか）と同様にフォーマルな関係の人には「私」を使っている。

小学生になる前は、自分を「ゆ○」と呼んでいたが「『うち、私』に変わった。ゆ○だと恥ずかしいと思った……。幼稚園のときには、自分を主張したいがために自分の名前を呼んでいたのだろうと思う。」(10) という。

彼女は、家庭内では「ねーちゃん」と呼ばれている。「友だち」や「アルバイト先」の人からは名字を基本とした呼び方をされている。

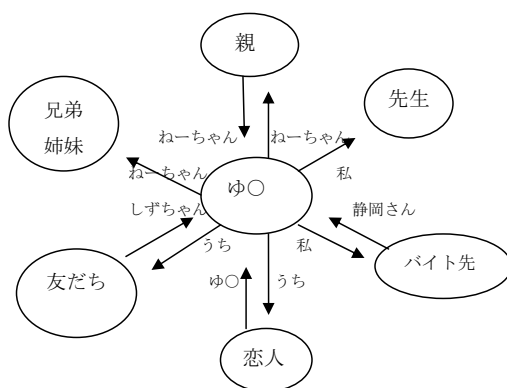


図5 事例5（静岡ゆ○）親族呼称を使う事例

考察

本研究の結果の概要は次のとおりである。女子大学生が他者に対して自分を呼称する（自己呼称する）時、「わたし」、「うち」、「名前」、家族関係（親族名称）を示す「お姉ちゃん」などが使われる。最も多いのは「わたし」である。自己呼称について、小さいときからの変化の様子をみると「名前+ちゃん」、「あたし」や「うち」、そして「私」という順序性が指摘できる。

自己呼称変化の原因は、各学校入学を契機とする場合、周りの友だちに影響される（同調する）場合、自己意識の高まりによる場合、親などから改めるように指摘される場合があげられる。

相手との関係で使われる自己呼称のパターンは、4基本パターンである。社会的距離感あるいはフォーマルな関係で使い分けしているものの、自己呼称に自分の名前を主に使うパターン、「私」を主に使うパターン、名前と「私」と「うち」などを使い分けるパターン、家族とは親族名称である「姉ちゃん」を使うパターンである。

自己呼称が、自分と相手との関係すなわち相手が目上か目下かによって使い分けられることは鈴木孝夫（1978）や藤井洋子（2011）によって指摘されている。また、目上か目下かというだけでなく、女子大学生が同性の同級生や後輩には「私」と「うち」を区別なく使い、異性には「私」を使い分けしていることはジェンダー意識と相手に対する敬意に基づく（有松しづよ・皆川晶，2011）という指摘もある。女子大学生に関する本研究からもこれらと同様な結果が得られているが、相手と自分との関係はむしろ心理社会的距離感からみることができよう。最近の学生は、先輩に対しても名前の呼び捨てや愛称（ニックネーム）を使っていたり、教師に対しても「さん」づけや愛称で呼びかけることをみかける。人間関係を目上・目下といった年齢関係と社会的地位関係の観点からとらえ

ているというよりは、親しさや身近さといったいわば心理社会的距離感からとらえていると思われる。心理社会的距離感の近い相手には、必ずしも「私」、「あたし」などの自己呼称でなく、幼児性を伴う自己呼称すなわち自分の「名前」を使うことにもなるのであろう。

「私」を使う基本パターン、相手や状況による自己呼称の使い分けのパターンについて、幼い時からの自己呼称の変化をみると、いずれもまずは自分の名前を自己呼称に使っている。自己意識は周りから「ある一定の記号（名前）で呼びかけられることにより、しだいに自分がある特定の名前を持った存在であることを知る」（宮沢秀次，1990）乳児期そして幼児期に徐々に形成される。自分はある特定の名前で、また家族は親族名称で表現され、一般的な人称代名詞の使用はその後になる。本研究のいずれの女子大学生も幼児期までは自己呼称に名前を使っていたという。小学校や中学校への入学時に名前から「私」へと自己呼称を変えることは、新しい自分の出発を自覚していると考えられる。また、周囲の友だちと自分が違った呼称を使うことの違和感は、自分と他者との比較に基づいた自己の幼さといった自己意識の気づきであろう。たとえば、「……大学に入ってから意識して“私”とよぶ……」（5）、「……『わたし』と呼ぶように気をつける……」（29）、「……『うち』（は）……品がないと、……」（16）、「……恥ずかしいと気づき始めた」（12）、「……恥ずかしくなって……」（3）などは、自己意識による自己呼称「私」への変化を記述しているものである。

一方、事例1（ゆーな）や事例2（りか）のように、多くの人に向けて自分の名前を自己呼称に使っている場合は幼児性を自覚していないのであろうか。本研究の多くの女子大学生が過去に自己呼称として自分の名前を使うことに違和感や恥ずかしい思いをもったことから、（ゆーな）や（りか）も同様な経験をしていると思われる。彼女らはそれにもかかわらず自分の名前を自己呼称としていることは、むしろ自己の幼児性や子どもの的なかわいらしさを強く主張しているのかもしれない。本人が名前を使って自己呼称するなら、周りの人もその名前を呼称することが当然と感ぜられるようになり、心理社会的距離感も近くなるであろう。また周りの友人たちと異なって、名前を自己呼称することは同調性への抵抗であり、個性の主張を表現しているのかもしれない。

「うち」と「ボク」という自己呼称について触れておこう。これらの言葉は、本来、方言や性別使用とされているが、マスメディアの発達に伴い、マンガやドラマなどを契機として流行し、限定されない使用がみられるようになった。西川（2003b）が5歳女兒の使い始めた「うち」が他の女兒に伝播する事例のように、「うち」や「ボク」という自己呼称はクラスや学校内での流行への同調であるが、自分と他者の比較のもとに集団生活のなかで自分の存在が疎外されないための行動であるだろう。

自分の名前に対する態度は自己受容と密接に関係すること（宮沢秀次，1989a，1989b）をふまえ、その名前を自己呼称に使っている女子大学生の自己意識、他者との関係認識についてさらに具体的にとらえることが必要である。

文献

- 有松しづよ・皆川晶 2011 キャンパス内における女子大学生の使用自称詞とその選択基準—日本語教育における自称詞の提示に係る基盤研究として— 近畿大学産業理工学部研究報告 (15) 37-41
- 藤井洋子 2011 日本語の親族呼称・人称詞に見る自己と他者の位置づけ—相互行為の「場」における文化的自己観の考察— 日本女子大学紀要 文学部 60 86-73
- 河崎道夫 2005 2, 3 歳児における自己及び「役」名の呼称 心理科学 25(1) 36-47
- 小嶋玲子 2005 自分を示す人称代名詞（自称詞）の発達的变化 (3) 日本教育心理学会第 47 回総会発表論文集 52
- 宮沢秀次 1989a 自己の「名前」についての意識 名古屋経済大学・市邨学園短期大学人文科学研究会人文科学論集 43 293-312
- 宮沢秀次 1989b 自己の「名前」についての意識と自己受容性の関係 名古屋経済大学・市邨学園短期大学人文科学研究会人文科学論集 44 89-101
- 宮沢秀次 1990 自分の「名前」についての意識—自由記述の分析— 名古屋経済大学開学 10 周年記念論集 523-543
- 西川由紀子 2003a 子どもの自称詞の使い分け—「オレ」という自称詞に着目して— 発達心理学研究 14(1) 25-38
- 西川由紀子 2003b クラス集団に規定された自称詞の使い分け—オレって言ったらヒゲがはえるんやで— 華頂短期大学研究紀要 48 155-167
- 小畠裕将 2014 男性の一人称代名詞の地理的分布—『方言文法全国地図』を用いて— 論叢国語教育学 広島大学大学院教育学研究科国語文化教育學講座 10 49-59
- 鈴木孝夫 1973 ことばと文化 岩波書店

(人間生活科学部教授・発達心理学)